金屋金五郎浮名額

豊竹若太夫直之正本

地謡御酒と聞く。〳〵。名も理や秋風の。吹けども〳〵。更に身には寒からじ。理や白菊の。〳〵着せ綿を濕めて酒をいさや汲まうよ。太夫客人も御覽ぜよ。ナホス月星はフシ限もなし。地所は潯陽の。江の内の酒盛。謡猩々舞を舞はうよ。蘆の葉の笛を吹き。ナホス浪の鼓どうと打ち。フシ聲澄み渉る。浦風の。秋の調べや殘るらん。可惜夜酒の附差しも更行く月を友として。誰が差しめをもしらためずあひといふ字を取違へ銚子かゆるも。憎てらし。酒の皮剝く辮として一つ受けては附差しの思ひ差しのと氣を持たす嘘言か誠かそりや眞實か。歌五智の如來の恵みもあろに。合手深き思ひを乘りかけ馬に。離れがたなき我思ひフシ思ふが故に。そのしがを。包むに餘る言の葉を人や聞くらん羞かしの。もりて我名は命毛に食ひ締められて善惡の。戀と思ひを掛けて見る歌額の小さんは醉うたとさ。足や千鳥足。荻の上風そよ。フシそよ〳〵と。吹くにつけても彼の人に逢はんと思ふ一念は。謡よも盡きじ〳〵。萬よしなき今宵の寢酒。注げども盡きず飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ足元はよろ〳〵と。ナホス弱り伏したる枕の夢の。覺むるも惟しや先づ暫し夢を結ばん此方へと。亂れ盃手に持ちてとある一間に三重へ入りにけるフシ既に其夜も。地色過ぐる頃下寺町の鐘の聲。寢耳に響き目も合はず。昔語や身の上の話に連れて酒の醉。まして小さんが一曲に大盡腰を蛻殼。立つも立たれぬ羽拔鳥枕をさげよ足冷せ。鹽茶持て來いきんたいしと。何を言ふやら譯もなくオクリ寢るより〴〵早く高鼾フシ更に性根は。地色無かりけり小さんは側を離れ得ず。御心は悪しからずや少しの酒にきつい醉。わし一人では介抱も空恐しや誰そおぢやナウ。ハテ夜は未だ若い筈なるに内外の衆は寢てさうな。モ何時ぢや知らぬ迄ヤア其處に寢て居る人は誰そコレ金五郎殿。こなさんは何の役目に來てぞいの。客樣酒に打ちもらされ術なかつて居さんす故わしは見る目がいとしぼい。地色總じて幇間といふ者はこんな時の差配ぢやに。爰へ來て背中でも摩らうといふ氣は無うて。同じ樣にこなさん迄擊うた振して手の悪いフシ嗜ましやんせと言ひければ。地色金五郎目を擦り〳〵。

詞ヤア旦那は酒に醉はれたかハテ氣遣ひな醉醒ます。地お藥を上げませんとつかつかと寄る所を。小さん袖をちやくと控へ。詞コリヤ何ぞきよろ〳〵と。行かいでも大事ないわしが御藥進ぜてから。たわいも無う寢さんした。地アレあの新は聞えぬか但し聾にならんしたか。聞えぬ男と知りながら。二日逢はねば逢ひたうて客に託け身あがりし。芝居へ行ては方樣の役滿つる迄此顏を。傍目も振らず見て居るは知つてか見てか知らねども。よう見に來たといふ臺詞一度も聞かずさりとては。氣强う生れ付かんした。詞一昨日もあの客が網代屋から呼びに遣し。近日國へ下るなりそちが心の外なくば。摑んで去んで奥樣にしてやらうとの豫言に。地否とは言はれずどうなりと。御心任せと言うたれど方樣に馴染めて。外へは行かじ我心但し行かうか遣り度いか。今宵の酒盛大酒とは知りながら。醉はして寢さしてその隙に積る思ひを語らんと。心に染まぬ猩々舞亂れ〳〵てあの如く。正體もなき有樣も根は方樣に逢ひたさの。餘り〳〵て世話に言ふ貧の盜みに戀のうたてや。客に買はして我思ふ男に逢ふは間男より。フシ衞罪深しさりながら。地色そこは許して給はれと客の方に手を合せ拜んで見たり涙含みコレ思くを言うて見て。わしが心を落着かして。下んせぬかと縋り附き忍びに。歎く哀れさよ。金五郎はつと驚き小さんが口に袖を當て。詞何ぢや見苦しい逢ふ度毎にめろ〳〵と。そちばかり世話燒いて俺は苦勞をせぬぢや迄。畫の役さへかしらくさ頭の皿が三萬程。破るゝ時にも客衆に召連れられて夜を明し。地遊ぶをよい氣と思やるか。どうぞ根引きの金の緒に取附いたらば身請して。金屋が奥に備へつゝ小さんを變へておさんよと。思ふばかりの樂しみは我身一つに留めたり。如何に幇間をすればとて二世と契りし女房を。客に逢はしてうろ〳〵と這ひ蹲踞うて指の股。廣げてわつと飲み給へ此處らは拙者が呑込んだ。不成の森の時鳥鳴くも鳴かれず頓桁の。食ひ違ふ程しやべつて後旦那がそちの手を引いて。床の内なる私語聞いて堪忍ならばこそ。死なん。死なんと思へども一人死ぬるは犬死よ。客にもそちにも恨みなし我身ながらも迷うたと。後の月から得道し床入前に酒飲んで。座敷を變へて聞かぬが佛。今宵とても其心思ひも恨みも同じ事。歌今暫しぞや又行て寢や。地身請の談合置いてたも。若しや其方に離れたら此身は如何なるべきと涙を。襟に傳はせり。小さん嬉しくア、今といふ今疑ひし。フシ胸の曇りが晴れたりぬ。地色根引の噂ある時はあちらこちらへへら使

ひ。内の首尾迄繕はんもういふ事もしまひ〳〵。どさんせ寢よと寄添へば。地如何樣首尾は今宵なり爰か其處かと見る所に。大盡うんと寢返れば二人驚き周章つつ枕元に畏り。犬の子〳〵〳〵と　ス工テ聲を揃へて敲き付け。又手を鼻に押當てゝ　フシ互に顏を見合せてゐな〳〵震ひ居たりける。地色小さん其儘銚子を取り金五郎が口に注ぎ。詞コレ卑怯千萬何事ぞ。假令まさかを見付けられ如何なる憂身に逢へばとて。地思ひ設けし戀ならずや前後を構はずどさんせと。手を取れば振放し。詞此年月鼠にさへ知らさぬ仲を現はして。互の爲になるべきか首尾なき時はいらぬもの。地又重ねて立んとすハテそんならば如何なりと。併し今宵は逢ひたさのなほし增し來る物思ひ。折さへよくば必ずと金五が耳に物言はせ。互の帶を纏ぎ合せ端を二人が腰に附け。引くを合圖に逢ふべしと。故と寢間をば遠ざかり　色オクリおのが。〈臥所に入りにけるフシ客は寢耳に聞澄し　詞扨は彼奴等は腐り合ひ不義を働く下繕ひ思へば憎し此儘に。知らぬ顏するものならば尙踏み付けて此上に。地何事をか仕出來さん身金を出して此奴等に。よい事さすも面憎し何卒恥を與へんと。暫く思案し。ヲ、能き手段是々と。我と領き素知らぬ顏。フシ尙高鼾轉やな。地色人は知らじな戀故に目は冴え返る床の内。小さんは寢顏空鼾そつと起きては邊りを眺め。月の影さへ嫌なるに座敷輝く蠟燭の。闇になれかしどうぞ消す。智慧は爰ぞと煙草飲む煙較べん振をして。故と打消しハアひよんなことしたわいと。言へども心は嬉しくて。暫しも更けぬ其内と合圖の帶を引きける時。大盡向うに立廻りそろりと引けばそつと寄る。小さんは金五と心得帶を手繰り手を取つて。嘸待兼ねて御座すらん來る首尾なくて今になる。客はたわいはどさんせぬ心落着け寢さんせと。言へども應のあらばこそ。詞アヽ辛氣恨みロ舌も時によるこんな時は言はぬが粹。あのうんつくが起きてから何にも物がないわいな地コレ如何ぞいの〳〵と。帶を引奇せ恨む時金五郎目を醒まし。樣子を聞いて氣を廻し。詞さては小さんが惡性にて又こそ外に夫求め。正しく逢ふに極つた。地捕へへて存分遂ぐべしとそろり。〳〵と差足し寄ると見えしが大盡小さんを取つて押へ。詞ヤイこゝな徒者の生畜生。旦那や我が目を掠め間夫の男を引入れて。ハテ結構な土性骨男が生面見て置いて。地きつと御禮申さんにヤレ火を點せと呼ばはる聲亭主は騷ぐ下男手燭行燈手提灯。松點し連れ駈け出でよく〳〵見れば大盡小さん。はつと驚き飛退り。逃げんとす

れど帶の端小さん諸共繫がれて。彼方此方へよろ〳〵と ヲシ隅に屈んで居たりける。地大盡少しも騷がぬ態それ先づ小さんが親方呼べ。詞宿の亭主花車小女郎皆皆出て樣子を聞け。尤も我は田舍者。色里曾て不案内。先達て小さん身請の相談致せしが。今日只今止め申す。尤も勤の身なれども一日買へば其日は女房同然なり。又金五郎儀は。客をいさめ萬の捌きをさする爲。色も望みに買ひ取らせ其上にまだ。露とやら迄せぶられ。身を旦那旦那といふからは是も下人と同じ事。地さうした身を持ちながら某が目を掠め。小さんと不義を取結び度々逢うたる事どもを。殘らず聞いて堪忍ならず頭から爪先迄。刻んでも腹癒ねど。所も惡し名も羞かし彼奴が野太い所存から。過ちなどある時は先非を悔ゆると申斐あらじ。そち達とても身に成代つて見たがよし。詞なれども前後を見る時は俗性賤しき賣物と。又露霜で世渡る人面の皮は厚くとも。地鳴らぬ太鼓の音聞けと。散々に打擲し見るも腹立ち罷り立て。それ引出せと言ひ捨てゝ ヲシ奥を差して入りにける。地色親方小さんを引立て。詞コリヤ金五郎。御自分の御陰にて身請を變替せられし代り。此女めを蝦夷松前へ賣つてやる。そなたに存分山々なれど。地今宵は故と許して置く足元の明い内。とつとゝ去にやれ追ひ出せと。下女。下男取卷いて門口へ突出せど。一言返す言葉もなく道理。道理と涙ぐみ。靜に歸る其風情うたてかりける 三段次第なり。

ヲシ實に戀草も。霜枯れて。地人の心も濕り行く。流れの里の人込みに誰が燃え棧を焚附けて。焰の煙噎せ返る。額の小さんは心から風呂の勤を引替て。同じ憂身も品變る。ヲシ茶屋の山衆の仲間入り。綿屋と言へる親方の。氣兼ねもよしや彼の人の。爲と思へば恨みなし。何れ切なき仲なれど登り詰めたる男には。外の勤もそこ〳〵に。田もやろ畔も遣り放し。たるは其れから其れ迄と思ひ オクリへ詰めたる ヲシ戀男。地色彼の金五郎に馴れ染めて。浮名の立つに從ひて客も。次第に落葉吹く風の音信聞く事も。まして逢ふ事奈良阪や此手彼手を盡せども。親方下女が氣を附けて。スエテ逢はぬつらさを諸る人。地色數多傍輩ある中にとめひさ二人は戀知りの。身に覺えある粹と粹客を仕舞うて表の間。火鉢手元に三鐵輪三人鼻を突合し。詞何と思はんすおとめさん。今宵の客の其中にあの八樣は宮仕へ。大方知れた給分で。地色わしを女房に持つてから仲居腰元下女男。心の儘に使はしよと來る度毎に贅張つて。節季の留めが合はうかの。わしは嫌でならねども。其

處が浮世の勤ぢやと思へば我と涙含む。とめも同じ心意氣其八樣は上の客。わしに登つたよしもりは。今年七十五ぢやといの孫曾孫持つて極樂の。地道へ片足向けながら來るより早く頻摺りに。ほつと飽き果て嫌なれど。詞花車樣の言はんすは節季に帳の消ゆるのは。よしもり樣ばつかりちや隨分廻りやと言はんす故。地虫を抑へて堪忍をするが勤と思はんせ。嫌な客にも逢ふ緣に引かれて思ふ男に逢ふ。爰らは勤のフシロ傳なり。地色兎角心を取直し嫌な男にも逢はんせと。樣々に諫められ小さんも少し笑ひ顏。實に是はさもあらん。詞此頃わしに逢ひに來る客は役者でござんすげな。知らねば是非に及ばねど知つては逢れぬ首尾ぞかし。地わしは是程立つれどもこちの男は如何思うて吳れる事ぞと倒れ伏し聲を。擧げずに歎きける。地色かゝる所へどれ衆ども綿屋の門に立塞り。額の小さんは爰に居る何と客になるまいか。地是は吉野といふ聲も。後や先やに入亂れ奧の座敷に三重へ入りにける。

金屋金五郎道行

牛冷泉戀故に。身は陽炎のありやなし。情一つを忘れ兼ね。暫し逢はぬもつらけれど。過ぎつる首尾を思ひやり。我と扣へし心の駒。フシオクリ今は〻離れて行く足の。何長町の一宿り客屋の內も夢結ぶ。地頃しも霜月二日の夜。星に紛へる白雪の降り積む道を高足駄。フシ杖傘を只頼め。我世に在りし身なりせば。かゝる客目はよもあらじ誠に小さんと我仲は。長地あの堀詰めの二つ井戸どちらを見ても深ければ客の障りと親方が。堰いてふつ〳〵逢はせねど。初めの程は町方の客と連れ立ち通ひつゝ。フシ折に觸れては。逢ひしかど。後は親方其手も食はず。今は詮方涙の雨やオクリ風の〻吹く夜もフシ雪降る夜半も。兜頭巾で顏隱し。逢ふ夜逢はぬ夜空定めなき今宵の首尾を祈らんと。高津の宮を伏拜み。スエテ千日筋の橋の上。角の芝居は我住みし。流れも淸き加茂川の。のしをに身をば任せつゝ。軈て頸見世ある筈と語らば嘸や喜ばん。心持も是に誘はれて池田屋迄は北嶋や。例へ如何なる三原屋にならば其れから其れ迄と。スエテ一人思ひを駿河屋と。樣々心フシ倉橋や。我若し浮世を去るならば後に殘りし。彼の人は。妾仇なや墨染の。尼が崎屋で身は濡衣 踊歌色が黑けりや大黑屋ちやと人が名立つりや少しはわく屋。湧くか湧かぬか筒井筒屋やの。二階座敷に。よねをばつみてフシ港屋。迄も漕ぎ寄せん。戀の相場の取遣りに。負勝のない色所。借りましよといふ聲は只耳

を擦りて嗤し。爰は許せと立聞きし。京屋伏見屋薩摩屋の門を過ぎ越し見遣りつゝ小さんが住みし綿屋なる。向ひの軒に立留り暫く。様子を 三四へ窺ひけるフシされども首尾の。地色あらされば綿屋の門に立留り。内を覗きつ格子に立ち。スエテ詮方なきの涙聲。歌坂田藤十郎杉山勘左。フシ扨は玉川。地色半太夫其外役者の口眞似し。我を知らする心意氣オクリ哀れへなりける戀路なり。地色小さんはそれと聞くよりも心に應へ嬉しくて。氣も魂もうか〳〵と客の氣嫌を窺ひて。表の格子に走り出で。歌見れば悲しや降る雪のフシ其中に。地色よにしよんぼりと立ち給ふ見るに眼も眩れ心消え。小聲になつてコレ申し金様ではないかいな。詞マア何としてござんした聞かんす如くわしが身は。方様に逢うたと言ふ憎しみに。地斯うした勤に下りました。二三日後の事八十郎様の便りで聞けば。御氣色悪しき御傳へマア何とした煩ひぞ。御食は常の通りかへ御藥はどの御醫者。支へには鍼がよい。ナウ其咳に冷えたらば尚悪しからんにコレ上らんせと後や先。身の勞りも打ち忘れ。思ふ思ひを語るのもフシ元は戀路の私語。地色金五郎も涙ぐみ誠に切なる志。辛い中にも我事を。忘れもやらで様々と心に掛けて給はるは。フシ宿世如何なる縁ぞかし。地色我はそなたに逢ひたさの夜晝となく夢現。面影なりと聲なりと聞いて樂しむばかりぞと。十日ばかりは此門を通らぬ夜半も無かりしが。浮名立つたる中なれば姿を變へて來にけらし。先づは無事なる顔を見て。スエテ嬉し涙も果しなき。某が氣色の事少しも氣遣ひ召さるなよ。詞扨來年の在着きは加茂川のしをへ抱へられ。近日よりの顔見世なり知らせてそちに喜ばせんと。地色思ふばかりに世話焼いて此寒いのに我は又。何の因果に來た事ぞ是ばかりは恩に着や。さて又勤を粗略せば。詞親方立腹强からん主と病に勝つ事なし此二つを語らん爲。地やう〳〵是迄來りしぞ又其内と出ければ小さんは襟に手を掛けて。詞モウ去なんすか今暫し語り度い事もあり。地先づ〳〵待つて下さんせと涙を流し留めける時。奥へ借りましよ二階へ借ろと。杉が呼ぶ聲耳突き拔けばスエテ是非も涙を袂に包み。地後にま一度一寸逢ひませうイヤもう去なう。歌まめで勤めやや煩らやんな。さらば〳〵の泣き別れ哀れと。言ふも 三四へ愚なりフシ夜は何時ぞ。地八つの頃誰かはいさや白浪の。六尺ばかりの大男大脇差の落し差し。三人一緒に立並び大道にはぢかつて。金五郎を通さじとフシ阿吽の如く立つたりける。地色何心なく金五郎靜に歩み行く所

先なる男言葉をかけ。詞そちは金屋の金五郎ではないか。そと尋ね度い事のあり。暫く待てと肘を張りいかつらしく留めければ。金五郎騒がぬ態如何にもさうぢやがさう言ふは誰そ。ヲヽ不審は尤も併し聖でも聞き知らん。コリヤ小野山宇治右衛門ぢや。改め言ふは管なれど。數年我れ小さんに戀ありて年々の給銀に倍を打つて使へども。靡かぬといふ仔細を聞けば。其方と腐合ひ役者仲間を堰かるゝ由。地外は格別此男は堪忍せず重ねて小さんと挨拶切らるゝかそれ迚も叶はずば。某今迄使うた金。耳を揃へ渡さるゝか。二つに一つの返答をフシ承らんと突掛かる。地色金五郎飛び退り。詞何事かと思ひしに是は興がる事を聞く。小さんは何ぞ勤の者。御自分の御慰み思ふ様に參らぬを此金五郎が知つたことか。それは此方の不調法私迚も金で逢へば。誰に怖れて糸瓜の皮退かうとも退くまいとも。地只今は申されず又使はれた銀欲しくば。小さんが親方と相對し返すならば受取られよ。詞芝居の悪が足らぬかして減多な事を計畫まるゝ。退いて通しやと行く所を後に控へし二人の男金五郎が手を取つて。コリヤ大岩岸右衛門巣桓伴右衛門ぢやが見知つたか。小野山に頼まれ後詰を仕る。併し役者仲間といひ元是は勤の戀。氣の立たぬ内小さんと退き宇治右衛門に逢はしてやれ。さすれば互に言分なしさもなければこちとら迄。地敵役仲間の一分立たず。物は料簡するがよし。サアおつと言うて呉れ何んと。〳〵と寄る所を兩人共に突放し。詞尤も挨拶過分なれど是ばかりは許して呉れ。殊に言分氣に入らずどなたが御意でも退かぬといふ。宇治右衛門腹を立てこりや〳〵兩人。工面で埒明く事なれば今迄手延びにすることなし。地可惜口に風引かすなサア是でも退くまいかと。三人一緒にするりと抜き茅花の如く差し附くる。金五も今は是迄と。同じく抜き連れ盲目打ち危かりける三頁へ次第なり地小さんはそれと聞くよりもナウ男衆は居やらぬかあれ〳〵表に喧嘩がある。出合へ〳〵と言ふ聲に家内の男近所の者。棒を揃へて馳け出でさせぬ〳〵と言ふ暇に。金五郎は行方のフシ何處ともなく逃げてげり。地色其中に宇治右衛門故と素知らぬ顔をして。詞何れも是は何事ぞ我々は立役者。冬葩りの聲遣ひ互に蠏詞のいひがちも。身振りに移り氣に乗つて調子が少し高いとて。地色誠の喧嘩と思はるゝかはて眠むたかろに御大儀と。辯の持つて言廻し心靜かに歸りしを憎まぬ者こそ三頁へなかりけり夜々通ふ。戀の里。地月夜烏の鳴く聲も。自ら只聞き辛く。晨朝の鐘聞いて歸れば曉の。閨は

淋しき物思ひ哀れなるかな金五郎。切なき戀に身を喞ち嵐烈しき夜もすがら。通ひし故に身を傷め今は枕も上り得ず。次第〳〵に朝顔の日影待つ間の憂き命。フシ扨も是非なき風情なり。地色かゝる所へ八十郎供に持たせる藥籠。涙洩る目を押し隱し後や枕に寄添ひて。詞今日の御氣色如何ぞや。これ御藥を申し請け只今歸り候なり。地心を强く氣も强く今一度本復あれ。思召すこと候はゞ心置かれず何事も。仰せ付けられ候へと。スエテ世に泌々と申しける。地色無慚なる哉金五郎。重き枕を漸う〳〵上げ。人々に介抱せられ世に。苦しげなる氣息をつぎ。詞今のは誰か八十郎。此處へおちやと手を取つて。地眼を開き打守り涙をはら〳〵と流し。詞今に限らぬ事ながら世にも嬉しき言葉ぞや。此態にては中々に堪るべきとも思はれず。若しも空しくなるならば構へて力を落さずと。變らず芝居を勤めつ金五郎が片割と。人樣に言はれなば千部萬部の經よりもこれに過ぎたる供養もなし。取分きそちが身の上は。此顏見世より立役者。其狂言の思ひ付きあるが中にも病氣故。今迄語る緣もなし。構へて座元によく仕へ傍輩衆と言分せず。町の御衆に憎まれな諸藝をなめれば人憎む。交際數多ある中に古今新左に粗略せば フシ歌の冥加も怖しゝ。地色平九郎と仲よくし一藝に譽を取り我名も絶えず世に殘さば。草の蔭にて嬉びの和歌を上げつゝ守るべし。詞假令耆婆扁鵲の藥なりとも。本復せんこと不定なり最期を待つより外なければ。地色最早藥を飲むまじと思ひ切つたる心意氣。二人の者は氣も亂れ。ナウ兄上金五郎殿。今死し給ふ今迄も御藥を參らねば。猶悲しさの優りつゝ介抱とても力なし。これ〳〵飲んで給はれと諫めつ泣いつ樣々に フシなほし增し來る涙なり。地色其折節太夫元のしをを始め傍輩瀧岡彦右衛門。山下又四郎萬右衛門病家に見舞ひ膽を消し。面々枕に近づき寄り額を抱へ脈を取り。詞ヤア最早是では堪るまい心に掛る事あらば聞き置かれたか八十郎。地扨も是非なき浮世やと スエテ忍び涙はせきあへず。地色のしを枕に近付き寄り。詞コレ金五郎殿見舞に來た。藥を飲んで養生し顏見世から出る樣に。地賴みますとありければ。金五郎打頷きヤア太夫樣か嬉しやな。詞今更御目に掛ること扨も扨も面目なし。我を人と思召し頭取迄仰付けられしに。地舞臺を一度踏みもせず空しくならん口惜しや。人に言はねど心には初めての太夫元。なんでも己れ來年は二つか三つか大當し。永く座元をさせませんと思ひし事も仇し夜の。露と消え行く黃泉の。フシ死出の旅路の役者となな

る。地色何事も〳〵定まる事と思召し。許させ給へ去りとては猶此上に弟の。八十郎を引廻し何卒役者となし給はれ。地分けて瀧岡山下殿哀れ世になき者どもを。偏に頼み奉る。何も形見は無けれども思ひ寄るべの浪枕。其品々を書置せん。然るべしとて萬右衛門オクリ料紙へ硯を取寄せて。硯の海に磨る墨も。涙に眩れて濃き薄き。スエテ筆の歩みぞ哀れなり。一筆書いて兎もすれば小さんがことを頼まんと。思へど先づは兄弟へ舞臺衣裳七流れ。二人の者に送るなり。亡き後迄も身に添ひて。フシ我命日を忘るまじ。地色守袋の觀世音のしを様へ參らすなり。詞舞臺上下岩倉殿舞臺刀二流れ。地色瀧岡山下お二人へ形見といふにあらねども。私の志せめて回向をなし給へ。蔦紗綾綸子紅絹二匹。フシさる客衆より賜りしを。綿屋に殘す思ひ草客にせかれて忍び逢ふ。恩の仇にて報じんの。念佛申して呉れかしと。地懇に傳へて給べアヽ懐しと言ふ聲もスエテ只弱々となりにける。地色誰かは斯くと知らせけん小さんは內を忍び出で。髪しどけなく振りみだき徒歩や洗足の風情にて。氣急つぎあへず驅け來り金五郎に抱き付き。ナウ嬉しやと言ふ聲もスエテ泣くより外はなかりけり。やゝありて申すやう。詞皆様御免なされませわしは綿屋の小さんとて金五郎様とは人知らぬ。仲にも深い妹背川。地渡らば共と誓ひてし仲を離れて只一人。後に殘されうか〳〵と月日ばかりを數ようか。たとへ主こそ隱されうと二人が仲は知れたこと。お弟御達が聞えませぬ何故この如くない先に。知らしては下んせぬ。如何に戀なき身なればとてこれは餘り胴慾な。只今わしが表にて金五郎は死んだげな。可愛い事ぢやといふを聞きあるにあられぬ我心。勤する身が此如く取亂したる形振も。せめてま一度逢ひたさの其一念や通じけん。互に顔を見合せてフシ嬉しくも又悲しやな。地色深いと言うた名ばかりにて逢ひ見ることも玉鉾の。捗らざりし病ふと聞き悲しい時の神たゝき。伊勢岩清水春日野や御多賀の社扨は又。高津生玉天王寺洗足詣りの願込めて。夫の命をせめて扨私が年の明く頃迄。生かせて給べと身に代へて祈る願もないことか是小さんぢやに物言うて。下んせぬかと取付けば早や氣息絶えてなかりける。人々わつと縋り付き空しき死骸に抱き付き。スエテ聲を惜まず泣き給ふ。小さん涙の下よりも皆様は涙まし。未だ無事にてまします時泌泌とした暇乞ひ。なされましたと聞くよりもなほし思ひは增鏡。映る姿を見る様に。思ひし事も今は只仇し浮世となりしぞや。扨いとほしや我故に人には浮名を

立てられて。逢ふ言の葉もあらばこそまして最期に暇乞ひなくて離れし身の因果。如何なる人が主となり如何なるものがわしが身に。なり代りたる世の中や。地後に止り片時も長らへ果てんやうもなし。此世は暫し假の宿未來は一つ蓮にて。契らんものを待ち給へと。既に自害と見えけるを皆々騷ぎ押し止め。詞實に理やさりながら。只今自害あればとて再び歸るものでなし。殊に親方大分の金銀出し抱へ置き。年季も未だ明かぬ内若し過ちのある時は。地崇つて來るは知れた事然れば先立つ金五郎。黄泉の障り是一つ近所の騷動世の誹。かれこれ思へば爲ならず。是非〳〵思ひ詰め給はゞ親方手前埒明けて。姿をも變へ亡き人の。菩提を弔はゞ如何ばかり草の蔭にて喜ばん。平に。平にと止められ。惜からざりし身なれども。後の雜儀を聞く時は死ぬも死なれず長らへて。片時も後に居られうか我身ながら我儘に。ならぬ浮世と身を嘶ちせき上げ。〳〵歎きしは理。せめて哀れなり。地色やう〳〵心を取直し止り難きを止るも。これ亦夫の爲ながら最早浮世は立てられず。契り朽ちせぬ證ぞと丈なる髮をふつつと切りコレ金五郎殿我形見。せめて未來も友白髮身に添ひ給へ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と言ふ聲も狂氣の如く見えにける。さらば〳〵の涙露霜月廿日の朝嵐消えし。金屋が浮き命哀れなりける物語。今に傳へて語りける。